

蕭乾と楊剛—蕭乾の作品を手がかりに

葉 紅

中国の作家、翻訳家、ジャーナリスト蕭乾¹⁾は、1999年2月北京の病院で、亡くなった。九十歳の誕生日を迎えてから、一ヶ月後の事だった。現代の中国文学界の殆どの作家の境遇と違わず、蕭乾も1949年中華人民共和国誕生以降の度重なる政治運動に翻弄され、三十年間も、文筆家として筆を奪われ続けた一人である。その「静かでもなく、平凡でもない²⁾」三十年間を経た後の蕭乾は、再び筆を取り、我が前半生を振り返り、数々のエッセー、翻訳、書評、書簡を世に送り出すようになった。中でも「楊剛文集」³⁾の編集を立案から、作品原稿の収集、選択、及び自らの回想文や後記の作成に至るまで、多大な労力と時間を費やした。1979年の「改正」時に、すでに七十歳に手が届こうとしている蕭乾には、大きな仕事であったと言えよう。また、この時期に発表された数編の回想録にも、度々、楊剛⁴⁾の名前が登場し、その事により、蕭乾の人生において、巴金、沈從文など生涯の友と共に、楊剛もまた、彼に大きな影響を与えた人物の一人であることを窺わせる。同時に楊剛は歳月と共に、人々の記憶の彼方に追いやられ、忘れ去られようとしたコミュニストであり、才気あふれる女性作家であったことを世間一般に示す事になった。

本稿は、蕭乾の作品を手がかりに、主に青年期の両者の関わりの足跡を辿ってみる事にする。

I

蕭乾の早期作品で、「我与文学」というエッセーがある⁵⁾が1934年、蕭乾が燕京大学を卒業する前年に発表された。文中では、自らの幼少期からの学業と、当時、人文科学に足を踏み入れた顛末が書かれていた。このエッセーについては、蕭乾が晩年になって、「事業と職業：『我与文学』」⁶⁾で、次のように付け加えている。「それは、私自身のための『広告』で、私は、出版社に入り、ジャーナリストになりたいと世間に広く自己ピー・アルすると同時に、記者業は、あくまでも職業としてであって、理想(夢)は、文学に携わりたいと伝えたものである。すなわち、ジャーナリズムを志す

が、それは、最終目的の実現—文学に関わりたい—の手段に過ぎない。」

「我与文学」では、汕頭から、北平（旧北京）に戻った1929年当時の自分の様子を描いた次の一節がある。

・・・・・・短い期間に、私の元来の欠点が悉く露呈し始め、極度の孤独に苛まれ、海の波にさえ苛立ちが募り、酒に手を出し、おきまりの女遊びにも溺れるようになり、享乐的な物語の世界にのめり込むようになった。・・・・・・そういう状態に陥っている自分を目にし、同情を示してくれた女性（原文：好心的女人）が意を決し、私を革命戦線に引き入れようとしたが、残念なことに、結果は失敗だった。

ここでは、「好心的女人」とあるのみで、名前を明らかにされていないが、この一節は、蕭乾の数多い作品の中で、楊剛に言及した初出の箇所である。

「我与文学」が世を問うようになって、四十五年後の1979年4月（この年の二月に、蕭乾が名誉を回復され、1957年に始まった反右派闘争以来、禁止された文筆業の再開が許された一筆者注）に書かれた「未帯地図の旅人」⁷⁾では、「・・・・・・『女人』とは、あまりに丁重さに欠く言葉遣いだが、楊剛がその女性である。彼女の導きのもとで、私は、感情の渦から身を引き、・・・・・・真剣に創作に向き合うようになった」と言明している。さらに、蕭乾の1996年以降に記されたと思われる手記⁸⁾の一つに、楊剛のことを「私が生涯において、とりわけ敬い、常に一目をおいている知友」（原文：我一生極為敬重的諍友）という位置付けをした。

満族人の父と漢族人の母の間に生まれた蕭乾は、生を受ける前に父を亡くし、女中を生業にした母に育てられ、その最愛の母も、彼が十一歳の時に病死し、少年蕭乾は、早くも天涯孤独の身となり、「その時から僕は、人生の茫々たる大海原での漂流が始まった⁹⁾」と氏が後に回顧している。窮乏生活に喘いでいた幼少期から、後に国際的に名の知られた大作家に成長するまで、中国国内は、抗争が絶えることなく、外国からの侵略を受け、受難の日々が長く続いた。中華人民共和国建国後もまた、度重なる政治運動により、しもじもの庶民まで安穏な暮らしが奪われ、ついにあの悪夢としか思えないような十年の災禍が起きた。そういう中国と運命を共にした蕭乾が、晩年にわが生涯を振り返り、故人を偲ぶ数々の作品において、楊剛に触れ、「我一生極為敬重的諍友」と表現したのである。

以下、蕭乾があ的那天も地も暗黒だった日々以降に発表された作品を中心、蕭乾が楊剛との出会いから振り返ってみる。

II

蕭乾は 1929 年、燕京大学在学中に、アメリカ人教師グレイス・ボイントン（中国名：包貴思）宅で開かれた朗読会の席上で、楊剛と知り合ったという記述がある¹⁰⁾。その時から、楊剛が 1957 年に亡くなるまで、二人は姉、弟と呼び合い、文芸作品の創作から、人生観にいたるまで、何でも話せる仲になった¹¹⁾。その詩の朗読会は、たびたびボイントン宅で開かれた。イギリス文学を教える教授は、学生を自宅に呼び、イギリスの古典詩を朗読し、学生にもさせた。ヴィクトリア時代の作品を主に選んでいたが、蕭乾は、「楊剛和包貴思」¹²⁾の中で、次のように自分をスケッチしている。

自分は本科生ではない（当時蕭乾は、卒業証書を必要としない燕京国文専修クラスに在籍し、ボイントンが教えるイギリス小説、詩歌の聴講生だった—筆者注）からか、あるいは、彼女が朗読の途中であっても、急に何かを思いついたように私に読ませやしないか、さもなければ、名指して私に感想を述べさせはしないかと、気が気ではなく、大抵の場合は、離れた隅の方でもじもじしていた。

そのような学生が多くいる中で、ただ一人、楊剛は、異なっていたと上記の文がさらに続く。

一人だけ、女子学生だが、全く物怖じしていないようだった。彼女は、いつもボイントンのそばに座り、時には、いささか湖北訛り混じりの英語で、唯物論の見地から、詩人の考えを批評したりもした。この女子学生は、すなわち楊剛—当時の学籍名は楊繽—であった。

楊剛は、この当時、燕京大学の英文学科の二年生であった。これに先立ち、江西省の南昌にある葆靈女子高校を優秀な成績で卒業し、さらに、在学中に、すでに創作活動を始めた才女である。学業のみならず、この葆靈女子高校に在籍中、北伐軍が南昌を占領する際、楊剛は、仲間と共に髪を切り、支援活動¹³⁾に加わった。1927 年に翻訳し、発表された彼女の自伝小説『挑戦』¹⁴⁾では、女主人公がこの時期に、ある青年活動家に恋心を抱き、その青年の誘いで、革命を志す気持ちが芽生え始めたというくだりがある。その後、燕京大学に入学した楊剛は、1928 年に中国共産党に加入¹⁵⁾したのである。その楊剛が蕭乾を革命の道に引き入れるため、百通に及ぶ手紙のやり取

りをし、革命の理論書を次々に貸したりもした。

一方、1926年崇実中学在学中に、すでにCY（中国共産主義青年団）に入った蕭乾は、崇実中学で、互助団を作り、反帝国主義の標語を書いた旗作りや、デモに加わったことなどを理由に、張作霖政府により逮捕された。後に釈放され、崇実に復学したが、1928年、北伐軍が北平に到達してから、崇実にも学生会ができ、蕭乾は、その主席に推された。この逮捕前後の活動時期において、時の情勢によるものか、蕭乾は漠然としながらも、「革命」を意識し始めたのである¹⁶⁾。学生組織の主席にもなった蕭乾は、革命は成功し、古くて封建的な分裂国家が統一され、新しい民主国家に生まれ変わった¹⁷⁾と思ったのだが、この後、学生運動のリーダーである事を咎められ、卒業を半年後に控え、退学させられた上、国民党にマークされていることを知らされる。二度目の逮捕から逃れるために友人の尽力で、南方汕頭へと向かったのである。蕭乾にとって、初めてふるさとを離れ、言葉も通じない他郷で暮らす寂しさを味わい、ここでの体験がのちに蕭乾の初めての長編小説『夢之谷』¹⁸⁾の原型となった。一年ほどの汕頭滞在を経て、北平に戻った蕭乾の様子が一変したのは、前に触れた「我と文学」の記述通りである。

この頃の楊剛との関わりを次のように描写したものがある¹⁹⁾。

女性：強い湖北訛りで厳しく問い詰めた。「こんなにも重要な理論書をあなたは、なぜ読めないの？……我慢してでも、読まなければならないわ。我が友よ、これは、暇つぶしに読むような本じゃないのよ。革命の真理よ！」

男は、しぶしぶ本を受け取り、「長たらく、読みにくいし、難解だ。どうしたって読みきれないよ」とぶつぶつ言い、「理論、理論って、せいぜいのところ、一枚の地図に過ぎず、旅行に取って代われるものでもない！僕がしたいのは、この目まぐるしく変化する三千世界を体験する事さ。……僕は、人生を探訪したいのだ」と声を張り上げた

「地図も持たずに？」

「そうさ。地図なんか、なくたって歩けるさ。その方が、もっと、ありきたりではなく、楽しいし、もっと……」

「崖から落ちるよ。さもないければ、果てしない人生の森で迷子になって、ライオンやトラに食われてしまうわよ。」

「構いやしないさ。どうせ人生は、一度きりだし。崖から落ちる？崖の下だって体験しない手はないよ。いずれ死ぬ日が来るのだから、ライオンやトラのおなかにいる方が、土に埋まっているよりも暖かいじゃないか」二人の話し合いは、大抵、彼のこのような人を

おちよくなったような反論によって中断させられるのであった。

この時期に至り、「私の志は変わった。私になりたいのは、もう革命家ではなくなつた。私は、気ままにさすらう、少年漂泊者になろうとしていた。私は、革命という試験に出したのは、白紙の答案だった²⁰⁾」。

III

蕭乾は、少年時代から働きながら、学ぶ事を経験している。教会学校である崇実中学は、数軒の工場を持っていた。学校で半日勉強し、半日働けば、学費や雑費が免除される制度があり、蕭乾は、そのうちの絨毯工場と羊乳工場で働いた。中学卒業後、練習生として、北新書局で雑用係りになり、雑誌『語絲』および単行文の校正、郵便局、印刷工場へのお使い、作家たちに原稿料を届けるなどの仕事を任された。わずか二ヶ月という短い期間だが、「北新は私にとって、もう一つの学校であつた。ここでは、五四運動以降の異なった多様な思想に接し、文学作品にも触れる事ができた²¹⁾。」指定された書籍を清書する仕事を与えられた事もあって、蕭乾が後日の文筆業に携わる訓練になり、同時に、作品をじっくり読む機会にもなった。この他にも、蕭乾は、生活のために、雑多なアルバイトをこなす傍ら、創作活動をし、たびたび新聞社に寄稿した。

二十歳のころ、輔仁大学英文学部に在籍している間、『中国簡報』(China in Brief)の編集を手伝い、主に文芸面を担当した。特集形式で魯迅、郁達夫、茅盾、沈從文など当時の文学界を紹介し、作品を翻訳し刊行した。1932年休学中に、福州の中学教師になり、そこでの生活体験を元にした初めての短編小説「蚕」を執筆し、翌年に沈從文編集の『大公報・文芸』に発表された。蕭乾の早期の作品の多くが、この大公報で世を問うようになり、まさに創作のゆりかご²²⁾として、発表の場を蕭乾に与えたのである。

1933年夏、福州から北平に戻った蕭乾は、燕京大学新聞学部に入転し、アメリカ人教授エドガー・スノーに出会う。エドガーは、中国滞在十数年の間、二年ほど、燕京大学で教鞭をとった。それがちょうど蕭乾が燕京に入籍したその二年間で、自分は幸運だったと蕭乾が振り返っている。蕭乾の広く人生を経験し、ジャーナリストの道を経て、小説を書くという、当初からの考えを固めたのも、エドガーの影響を少なからず受けたからである²³⁾。その頃のエドガーは、1931年頃から、『活的中国—現代中

国短編小説』(Living China)の編集に着手していた。かつて蕭乾が『中国簡報』の編集に関わったと同じく、『活的中国』の第二部の編集を手伝ってほしいと申し出た。蕭乾は、さらに、楊剛をエドガーに紹介した。この時期の楊剛は、英文学専攻で、直接エドガーに教わる事はなかったが、しかし「新しい事には、私よりもずっと貪欲であった。²⁴⁾」楊剛と蕭乾は、エドガーの軍機処にある住まいで、外国の新しい本に触れるなど、新しい考えに接する機会を得たのである。

『活的中国—現代中国短編小説』は、1936年ロンドンのGeorge G Harrap社によって出版されるが、二人は、エドガーに魯迅以外の作家の選択について、意見を求められた。

スノーの家に行くと、いつも私たちは、好きな作品のあらすじを話して聞かせた。当時、楊剛は、マルクス・レーニン主義の文学理論について、研究していたため、作品の推薦した後は、きまって、その作品について、一通り批評したりした。エドガーは、メモを取りながら、時々頭を上げ、笑顔で、私たちの発言を促し、性急に結論を出そうとしなかった。……彼は美辞麗句を並べたようなものを好まず、当時の雑誌『現代』に、大都会の生活を描いたような流線型の作品が載っているが、彼は、一切興味を示さなかった。表現が少々荒削りであっても、暴露型、遣責型の中国社会の現状を描いている作品を求めた。……作品の批評は、主に楊剛が担当し、私は、翻訳を多く手掛けた²⁵⁾。

『活的中国』の第二部では、茅盾、田軍、丁玲、柔石、郭沫若、巴金、沈從文などの作品を収め、さらに、蕭乾と楊剛にも、一篇ずつの作品を求められた。蕭乾は燕京大学に移ってから、小説を月二、三編書いては、そのうちの一、二編を『大公報』や『水星』に送っていた。採用されると、いくばくかの原稿料をもらい、食いつないでいくような生活だった。その中で、エドガーは、蕭乾の救世軍を題材にした「皈依」に注目し、それを訳して、『活的中国』に載せるよう求めた。大作家たちが名を連ねる本に、自分の作品を載せることを蕭乾はためらったが、「スノーは、すぐに、私の気持ちを察し、自分が大事にしたいのは、有名作家かどうかではなく、作品の社会的内容である。自分も救世軍を嫌っている。……²⁶⁾」

蕭乾と同様に作品を求められていた楊剛は、1930年閩錫山に逮捕され、投獄されている²⁷⁾。その後、北方左翼作家連盟の結成に尽力し、共産黨員としても精力的に活動を展開していったが、32年、猩紅熱を患い、治療後も、気力が充実しない時期が続き、党の活動方法をめぐる見解の違いもあって、同年脱党したのである。この頃と

思われる短編「一塊石頭」が『現代』²⁸⁾に発表されている。共産党を脱退はしたが、「一塊石頭」の中では、「黎」という左翼活動家を描いているし、実生活でも、この時期に次兄、楊潮を始め、多くの人を革命の道に導いた。

エドガーに『活的中国』に掲載される小説を求められた楊剛は、「直接、英語で二編作成し、スノーに選んでもらった。……後に、ある革命家夫婦が国民党に捕まり、投獄される状況を描いた『一部遺失了的日記片断』が採用された。（その作品の掲載に当たり一筆者注）楊剛は、本名を用いない事を希望し、私からスノーに頼むようにと、持ちかけられた。彼女は『失名』と署名した。彼女自身の身の安全のためであろう。この秘密は、今日まで守られた。」出版に当たり、スノーは、著者の「失名」の箇所に、次のように書き入れている。

これは、ある中国女性作家のペンネームである。作者は、湖北省の名家に生まれ、父は湖北省政府の要人である。作者は、社会的題材で革命を描こうとしていることは、中国の文芸作家が過去を清算し、革命に邁進することなどなかりと、信じて疑わない人々には、大変な衝撃を与えるであろう。²⁹⁾

この作品は、1935 年楊剛によって、「肉刑」と題を改められ、『国聞周報』で発表された。

IV

『大公報』の文芸欄は、若き蕭乾の作品に、発表の場を与えた事は前に触れた。広告も兼ねた「我与文学」が功を奏したのか、燕京大学を卒業する半年前に、『大公報』に「予約」³⁰⁾され、1935 年蕭乾は、『大公報・小公園』（後に楊振声、沈從文担当の「文芸」と合併し、「大公報・文芸」になった一筆者注）を任された。マスコミ界に身を投じる事は、最終目標達成の前段階のステップで、蕭乾の宿願だった。

「大学を出て、すぐに、このようなやりがいのある職につけるなど、自分は非常に幸運だった³¹⁾」と蕭乾が「我与副刊」で回想している。

大公報に着任してすぐ、蕭乾は、さまざまな仕事に着手した。中でも、書評に力を入れた。彼の新聞学科在学中の卒論のテーマであった事もあるが、何よりも中国にとって、この分野は、文学界の空白と感じたからである。

コラム「書報簡評」欄を設け、短い期間に、このコラムの協力者として、二十名に

及ぶ友人の賛同を得、定期的な寄稿を約束してくれた。楊剛もその一人であった。楊剛は、「愛着」、「翁」などの短編小説をこの時期に創作し、オースチンの『高慢と偏見』³²⁾の翻訳を手がけ、雑誌『大衆知識』の編集に当たり、「境与真」など文芸評論を発表した。『大公報』の「書報簡評」欄に「冒険与裁判」を寄せ、37年の「一反差不多」論争の特集にも「関与『差不多』」を載せている。

蕭乾は、地方に出向いての取材活動も行い、1935年秋、山東省で発生した大水害の現場から、被害状況をルポにし、伝えたところ、各界から大きな反響を呼び、募金が続々と送られてくるようになった。ルポの集大成とも言える作品が「流民図」³³⁾である。

1939年蕭乾は、ロンドン大学・東方学院の中国語講師として招かれ、中国を離れるが、その後も特派員として、『大公報』に記事を送り続け、1950年まで、兼任の時期もあったが、延べ十五年間『大公報』と歩みを共にした。渡英を前に、蕭乾は、楊剛を後任にする事を提案し、他の候補もあった中で、彼女が最も適任であると強く主張したという。

蕭乾が渡英し、楊剛が『大公報・文芸』を引き継ぎ、異なった土地で、各自の任にあたる事になっていくのだが、共に育ててきた『大公報・文芸』が両者を結び、何でも話せる知友関係が保たれた。1946年、蕭乾が帰国以降もまさに公私にわたり、楊剛の助言を受けることになった。1949年、蕭乾があゝの「人生の十字路」に立たされた際、彼がいかに決断したか、後の数編の回想録で明らかになっていくのだが、一方、楊剛の方は、その後、『大公報』の特派員として、アメリカに赴き、建国後は周恩来首相主任秘書、中国共産党中央宣伝部国際宣伝部長、『人民日報』副編集長と、どんどん抜擢され、出世していった。しかし、新中国が産声を上げてまもないこの時期に、二人は早くも中国共産党内での政治闘争に巻き込まれていくのだが、この建国前後を一つの歴史的な側面として扱い、次稿に譲りたい。

註

- 1) 蕭乾(1910~1999)については、丸山昇「中国知識人の選択—蕭乾の場合」(『日本中国学会報』40)、「建国前夜の文化界の一断面」(『樋口進先生古稀記念中国現代文学論集』90・中国書店)参照
- 2) 「往事三瞥」(『一本褪色の相冊』百花文芸出版社・1981)
- 3) 『楊剛文集』(人民出版社1984)
- 4) 楊剛(1905-1957)については、江上幸子「二十世紀初期の中国人誕生の苦痛—1930年

代の楊剛の夢と苦痛—」(『魯迅と同時代人』汲古書店) 参照

- 5) 『我与文学』(生活書店 1934)
- 6) 『余墨文踪』(百花文芸出版社・2000)
- 7) 『一本褪色的相冊』(百花文芸出版社・1981)
- 8) 「故土情結『往事三瞥』」同注 6)
- 9) 「一本褪色的相冊」同注 7)
- 10) 「楊剛和包貴思」同注 3)
- 11) 「魚餌・論壇・陣地」同注 7)
- 12) 同注 3)
- 13) 「憶楊剛」 廖鴻英 同注 3)
- 14) 『小説界』87-4
- 15) 入党の時期について、諸資料の中では食い違いがある。『二十世紀中国女性大学史』盛英(天津人民出版社)では「1930 年」としているが、「楊剛」『新聞界人物・十』(新華出版社),「楊剛年表」同注 3))では「1928 年」としている。
- 16) 同注 7)
- 17) 同注中 7)
- 18) 文化生活出版社初版, 1937, 広東人民出版社, 1981
- 19) 「未帶地図的旅人」同注 7)
- 20) 同注 7)
- 21) 同注 7)
- 22) 同注 11)
- 23) 「斯諾与中国新文芸運動」同注 7)
- 24) 同注 23)
- 25) 同注 23)
- 26) 同注 23)
- 27) 逮捕される前後の様子は、「一個年輕的中国共产党員的自伝」『楊剛文集』で詳しく記されている。ただし脚注によると、この原稿は、タイピングされたもので、「獄中」の章に万年筆で 1931 年に書いたものという注があるのみで、楊剛本人の筆跡かどうかは不明である。原稿そのものは、蕭乾が 1979 年訪米中、インディアンナ大学のフィリップ・ウェスト教授の協力を得て、故グレースの遺物の中から発見された。
- 28) 『現代』33-4
- 29) 同注 23)

- 30) 『八十自省』(上海文芸出版社 1991)
- 31) 同注 30)
- 32) (商務印書館 1935) 署名 楊續
- 33) 『人生采訪』(上海文化生活出版社 1947)